



☆ビリギャルを支えたママの話☆

娘の「受験やめたい」の言葉に「やめてもいいんだよ」となぜ、私は言ったのか？

『ビリママ』著者／「ビリギャル」の母 橘こころ



子どもがそれぞれの「ワクワク」と出合えば、潜在能力が発揮され、みんな奇跡を起こせるようになる、私はそう信じてやってきました。娘に坪田信貴先生の塾を勧めたときもそうでした。

「さやかが一番ワクワクすることって何かな？」と思い、その一つとして挙げたのが「塾」だったのです。そんな娘も大学受験に向けて勉強しているとき、成績が上がらず、合格ラインに近づかない時期がありました。娘は誰よりも勉強し、成長している自負があり、「E判定（合格は絶望的という判定）がそろそろ変わってくる頃かな」と思っていました。

そんな高校3年生の秋頃の模試の帰り道のことでした。「こんなに勉強してるのに結果が出ない。坪田先生の言ってることは本当なの？」、そんな不信感で怖くなり、模試の会場に迎えにいった車の中で娘は泣き始めました。その日の夕食はサムゲタンにしました。娘が失敗するイメージに襲われ勉強に向かえそうにないと思った私は、あえて「さやちゃんの好きなもん一緒に作ろっか？」と声をかけたのです。娘は、「さやか、もうダメかもしれない。こんなに頑張ってきたのに・・・。やっぱり慶應なんて受かるわけない」とまた泣き出しました。「さやちゃん、よくここまで頑張った。今だったら、きっとまた別のワクワクを見つけられる。そんなにつらいなら、やめてもいいんだよ」と私は言いました。

でも娘は、夕食を食べ終わる頃にはまた「やっぱり私、受験やる」と2階に上がっていきました。そのとき私は「娘が上手いかな自分の姿を払拭できなければ、もはや鉛筆さえ握れない状態になってしまう」と感じ、どうしてそうなったのか考えまわした。そして、「できる自分の姿」を心に描けなければ本来の力が発揮できなくなると思います、実際に娘と一緒に慶應大学を見に行くことにしたのです。慶應大学をその目で見た娘は、ワクワクのイメージが再び湧き、自分を奮い立たせ、もう一度信じてあ

あのと、「もし娘が受験という選択肢をあきらめたとしても、それでいい」と私は考えていました。それは娘が「『やっぱりこれはワクワクじゃなかった』という選択をした」ということだからです。つまり私は、「彼女自身で選択することに意義がある」と考えていたのです。「たとえ途中でやめても、いつか本当に出会いたいものに出合える。どんな結果もムダじゃない。全てを決めるのが子ども自身であることに一番の意義がある」と思うのです。

大人の駆け引きを抜きにして心の底から娘に「やめてもいい」と言ったことで、それが娘の背中をもう一度押したのかもしれない。「もう少し頑張ってみたら」とか「これまで幾らお金がかかったと思ってるの？」などと言っていたら、娘は本当に受験を諦めていたのかもしれない。どのタイミングでどんな言葉をかけるのか、それが子どものワクワクにとって、とても大事なのだと思います。

☆2学期期末テスト終了！9頃の取り組みが試される☆

11月20日（火）～22日（木）の3日間にわたり、学期末テストが行われました。範囲があるテストだったので取り組みやすかったでしょう。ただ、ここに来て勉強に対する意識にかなりの個人差が見られるような気がします。2学期もあと一ヶ月・・・この受験の波に乗り遅れるな！